

今やらねば

田中館愛橋の生涯

18



【郷里の町葬】

福岡中の校庭に2千人

1944（昭和19）年、88歳になった田中館愛橋は、1月に朝日文化賞、4月に文化勲章を受ける。翌1945（昭和20）年3月、空襲に遭い家を焼失、郷里の福岡町（現二戸市）に疎開する。以来田中館は福岡で夏を過ごし、大事な仕事は汽車で東京に通ったが、当時の東北本線は東京までほぼ一昼夜かかっていた。老父の出張には娘の美稲が付き添うのが常だった。

田中館は「昔は東京まで13日、父が死んで大急ぎに帰った時でも5日かかった。今は一日だ」と喜んでいたり。郷里での田中館は毎日1時間のお風



福岡町（現二戸市）の福岡中学校で行われた田中館愛橋の町葬の様子。途中の沿道にも人があふれた
(田中館愛橋記念科学館提供)

呂と、2時間の散歩を欠かさず、娘美稲が付き添う姿に町の人々は親しみをこめて「おらほのお爺さん」と呼んだ。二人の姿は街の名物だった。散歩とお風呂の他は外国語の本を読んでいるか、タイプライターに向かってパチパチ打っているお爺さんだった。

ある時、近所の高校生が「何でそんなに勉強するのか」と尋ねると、「世の中は毎日変わっていく、だから毎日勉強しないと遅れる。そうならぬよう、今勉強するのだ」と答えた田中館は、

とつくに90歳を超えていた。

古里から田中館が帰京するのは秋祭りを見てからと決まっていた。

1946（昭和21）年の帰京時に残した歌がある。

「花咲かば また帰り来む

ふるさとの もみじの山を

見つつ行くなり」

1952（昭和27）年5月21日。田

中館愛橋博士の死去がラジオの臨時ニュースで伝えられた。95歳7カ月の生涯であった。26日、東京大学安田講堂で田中館の葬儀が初の日本学士院葬として行われた。安田講堂でお葬式を行った人は、田中館ただ一人だという。

6月7日、東京から一昼夜をかけて田中館の遺骨が帰郷した。北福岡駅（現二戸駅）に翌8日到着の列車を福岡町の人々は出迎えた。遺骨はわざわざ盛岡から呼び寄せたタクシーで寓居まで運ばれ、沿道は人々であふれ、途切れることは無かった。東京から葬儀に参列した人々は、町中が博士の死を悲しんでいることに深く驚いた。

【ミニコラム】 弟子たちが勲章推挙

種まきの爺

田中館愛橋は文化勲章を1944（昭和19）年に「地球物理学及び航空学」の功績により受章したが、弟子、孫弟子の4人がすでに受章を果たしていた。

日本のすべての物理学者のルーツ「種まきの爺」と呼ばれる田中館は、自身より弟子の出世を誰よりも喜んだというが、「恩師である館先生を差し置いて受章するのは心苦しい。まずは先生に」と弟子たちに推薦されての受章だった。

田中館の葬儀は福岡町葬として行われ、式場の福岡中学校校庭には2千人を超える人々が参列した。正午のサイレンと共に神事による葬儀が始まり、あまりに静かに整然と行われることに「さすがは田中館先生の古里だ、東京ではこうはいかない」と参列した博士たちが感動したという。

（中村誠二 田中館愛橋会事務局長）